

## 天津氏 写真集を刊行

# 『天津孔雀の朗唱演戯』

新しい同人、天津孔雀氏の写真集『天津孔雀の朗唱演戯』

「私をきれいといった男はみんな死ぬー」が刊行されました。刊行日は二〇二二年一二月で、著者（写真及び文）は、海野隆氏です。

天津氏のプロフィールなどについては、写真集の最後に次のように紹介されています。

「イギリスで生まれ、幼少期をドイツ、ルーマニア、ポーランドで過ごす。国籍、年齢、性別不詳。幼少よりボードレール、日夏耿之介、濫澤龍彦、塚本邦雄等に親しむ。長じて、フラアンジェリコとボツティエリの描く天使の姿に憧憬を抱き祭壇画を学ぶ。傍ら、ロックバンドを結成し、音楽と言葉による密やかな革命を試みる。バンド解散後の数年間は画家として点描による作品を発表、夢告の『孔雀』を画号として名乗る。」

詳細な活動歴も紹介されており、「二〇一六年六月、京都にてボードレールの詞華朗読で舞台デビュー。同年一月舞踏青龍會（主宰・原田伸雄）に参加。以降多くの舞台で朗読、舞踏などで活躍中。」とされ、「二〇二一年四月の実験映画『零へ Toward Zero』に主人公（原田伸雄）を死に誘う悪魔

の美少年役で出演」とあり、さらに「綺語鍊金、馥郁たる言葉の幻妖を樟り立たせた虚構のリアルに殉ずべく、『朗唱演戯』という新領域を開拓中」とあります。

この写真集の著者であり写真家の海野隆氏（自らを『光の狩人』と称す）の、写真集刊行の「ことば」を紹介します。

天津孔雀さんの朗唱演戯を初めて見たのは

二〇二一年七月、京都BANKUINでの公演だった。

単なる小娘に見えた孔雀さんが、

舞台では妖気ただよう熟女、老女に変身していた。

アートや文学に造詣が深く浪漫の大海を泳ぐ、

ただならぬ才能を持った人物だと思った。

以後、孔雀さんを追ってシャッターを押し続けた。

これらから、天津孔雀氏が見えてきます。新たな『海』の同人として、氏の活動歴から放たれるであろう新鮮な作品との出会いをおおいに期待するものです。（文責 有森）



最後に、写真集の末尾に『孔雀賛歌 夢の旅立ち』と題し、  
同人の井本元義氏が寄せている散文詩を紹介します。

暮れ方少年が海辺の宿に訪ねて来た。真紅の薔薇を両腕  
に抱えて化粧は清楚で美しい。両の眼は緑色に妖しく光  
っている。

明日旅立ちます。

故郷か異郷かまたは冷たい永遠の臥所か知らぬ。

写真を撮ってください。

注いだ赤葡萄酒は芳醇な薔薇の薫りに混じった。

少年は自由に動く。椅子の彼はいきなり足元に薔薇をばら  
撒く。無音の音楽に合わせて体をくねらせる。連写する  
シャッター。Tシャツがなだらかな肩から滑り落ち細い  
腕に挟まれた胸の突起が表れる。ジーンズを脱ぐと女性  
の下着をつけている。少年ではなく女性なのか。それを  
脱ぎ椅子から崩れ落ちゆっくり転がる。引き裂かれた若  
木のような二本の脚の間に蓄のような男根が覗く。

転がると首筋と腕と背中と腰に棘が刺さり肌が痛みに痙攣  
する。血が滲み出る。それを舐めると口紅に混じる。薔  
薇の花弁は血を吸った絹のハンカチーフ。

カーテンを落とすと水平線の黒い雲の背後を覆う薄い薔薇  
色が見える。そのかすかな光が波に反射して漣になって  
部屋に差し込んでくる。白い肉体に映って縞模様揺れ

る。

闇が降りた。火酒を染み込ませた新聞紙を陶器の大鉢に投  
げ込み火をつける。一瞬燃え上がる青い炎が見つめる瞳  
の迷宮の奥に果てる。脇腹の傷口を浮かび上がらせる。  
大輪の薔薇。  
フィルムは尽きた。

満月が昇った。月光が満潮の海面を雪のように照らした。  
二人は全裸で飛び込む。絡み合つて泳ぐ。果てしなく冷  
たい沖へ流される。海は黒く重い巨大な虚無の塊である。  
二つの肉体は燐光になって白く揺らぐ。光を知らない深  
海魚は奈落の深淵に沈む。世界は死滅した。

そして優しい朝の微光を反射する鏡の白い砂浜。凜として  
動かない少年の立像。虚空に満ちた未来への旅立ち。

(小説「貴腐薔薇」より)